

苦しかった戦争の思い出

豊城町 関根秀次郎（八十一歳）

二〇一三年（平成二十五年）七月

昭和十六年 十二月八日～二十年八月十五日

私の知恵がついた頃からの思い出

生れたのは、昭和六年十二月二十五日

今、はクリスマス、と言っている日でしたが其の頃は、大正天皇がお隠れになられた日でした。

知恵がつき、この頃は、「満州」今の中国東北地方、満州事変で日本が勝ち、この国を日本の弟の国にすると言つて、軍備拡大の真つ最中でした。その頃、我々が政治の話など何一つ口に出す事など出来ず、特に役人の耳に入るとすぐ、警察問題になり何一つも具申をする事は出来ずの日々でした。

自分の家は、小学校に入学してから知った小さな、小作人百姓でした。夏の暑いときに、手入れをして作

った米を秋になりやつとの事で、出来た新米を、リヤカーに積んで、土地代として地主に運んだ時を思い出す。そんな事、ひと時で忘れ、早くお祭りが来ないか、こんなことが楽しみに待って居た。又、早く正月が来ないか、其の頃のお小遣い、五銭か、十銭、今の一月の十分の一位、今の子供にはわからないだろう。それに、今のような白いご飯が食べられるのが本当に嬉しかった。

其の頃の農家はどこの家でも押し麦と米とが半分ずつの食事であった。

私くしは、昭和十三年四月、佐波郡東村、尋常高等学校に入学していた。その時はすでに、日本は、戦争をして居た。中国と支那事変と言って子供の教科書も新しい本は古い本が手に入らない者に与えられる位で古い物ばかり物資は、みんな軍備を拡大するため学用品まで押さええられて居た。小学校四年生の十二月八日第二次世界大戦が始まった。満州事変、支那事変と、そして大東亜戦争と日本は戦争ばかりを続け、国民を

苦しめた。まして、大国である米国、英国を相手にこの朝のニュースで日本海軍が、ハワイの真珠湾でアメリカ海軍の太平洋艦隊を全滅した。この海戦に群馬県前橋出身の岩佐直司、海軍中佐が攻撃の指揮官であった。特殊潜航艇と言う潜水艦を持って特に群馬県民は、燃え上がって居た。勝った、勝ったで各地で夜は、提灯行列で大騒ぎ湧き上がって居た。苦しい生活など忘れて毎日のニュースは、勝戦の話であった。南方の国、そして島々を占領した。このような時にアメリカ領土を占領して居たアリューシャン列島のアッツ島、キスカ島、二島を占領していた。

群馬県高崎に居た連隊の山崎部隊が玉砕をした。ニュースが入ってきた。

寒さと、食糧不足であった。この頃から急に、毎日が厳しくなってきた。時々空襲で学校に行っても勉強できず、毎日宿題が出され、この問題も先生がガリ版で刷ったものだった。家に帰っても、農作業を手伝って、夕食後始めると、其の頃は、明るい所で、机の上で勉

強することは出来ず、明かりが外に漏れると、夜、夜警団が回って居て灯火管制と言って明かりが外から見えると注意され、リング箱を机にして宿題をやった事を思い出す。毎日学校へ行くだけで、毎日農家の勤労奉仕と言って父、兄、若い者が居ないので、暑い夏、草取り作業を毎日のようにやった。

都会の小学生は、毎日の空襲で勉強が出来ず山村の山の中の神社や又、お寺の本堂などに親と離れ疎開をさせられて居た。東京に居るはずの父、母、が爆撃で亡くなられた子供も居た。私達は高等一年生、今の中で工場に行き飛行機の部品作りの作業をさせられた。

私達は、東京赤羽の軍人の服を作る工場が疎開して行くので其の作業に出されて居た。昭和十九年秋神風特別攻撃が出動した。

この頃は、国はどうにもならない状況に成って居た。我々昭和五年、六年に生まれた者は教科書も無く学用品もなく、ただ戦争、戦争で毎日を送って居た。毎年

八月に入ると、あの戦争、原爆、終戦を思い出して言い合う時であるが、昨年三月原発、地震、津波と大きな出来事でこの話は薄れたような気がするが、大正十二年の東京大震災、東京大空襲（昭和二十年三月十日）昭和二十年八月六日。広島原爆、九月には長崎、原爆と全国民が一丸と成って復興に力を合わせて早く立ちなおった。戦争、戦争で物のないことに文句もいわずにいた。学校へ行くにも裸足で行き、靴などまっただなく学校で配給になり、やつと当たり、四、五日学校へ通うと底が割れてしまったりした。何とも言えない可哀相だったのは、食べ物はなく、町で生活をしている人達は暑いのに子供を連れて手を引き一日に何回も走らない乗り物で買い出しに出てやつとの事では手に入れた食料を取り上げられる人も居た。

戦争は、やってはならない、国民が泣くばかりである。平和を守っていく事を願うばかりである。

平成二十五年七月、関根秀次郎さま投稿文